

5. 37°C Incubation による成長ホルモン 2抗体法について

中嶋 典子 岡田 義昭 原田 義道
(鳥取大学 第3内科)

成長ホルモン(GH)2抗体法は、従来4°Cで第1反応72時間、第2反応24時間の方法がとられてきたが、測定法の簡素化をはかるため、37°C incubation 法について検討した。37°C の incubation の条件は第1反応24時間、第2反応3時間で行なった。

その条件でみるかぎり、測定感度は、0.62ng/ml 再現性は、同一アッセイ内では $100 \pm 4.72\%$ 、アッセイ間では $100 \pm 9.85\%$ 、また回収率は $107.1 \pm 30.7\%$ と4°C法とほとんど差はなく、高濃度検体の希釈曲線は、標準曲線とよく平行した。4°C、37°C の incubation の両方法で得た同一検体の測定値は $r=0.95$ をもってよく相関した。

以上より、37°C incubation 法でも測定しうることを示唆する成績を得た。

質問： 岩崎 一郎(岡大 第2内科)

演題2において Radioimmunoassay の方法論に用うる考察を述べているが、これに対する同様の工夫を第5席の演題で発表される先生のご意見をいただきたい。

答： 中嶋 典子(鳥大 第3内科)

反応時間を短くするという点で、GHに関しては、かなりいい成績を得ている。従って4°Cの従来の方法で測定した値との関係がよくいろいろ問題がなければ、いいのではないかと思う。

質問： 木下 博史(県立広島病院 放射線科)

インキュベーションの温度をわれわれは4°C \pm 0.5度として安定化しておりますが、その必要性に関しましては如何でしょうか。

追加質問： 岩崎 一郎(岡大 第2内科)

この演題で発表された変法をこれから実際に自信をもって取り上げて行かれるかどうかお尋ねしたい。

原法で得られる成績と変法で行なわれる成績との間には演題で発表したわれわれの成績でも一応密接な相関があり、このまま臨床的に応用出来そうに考えられるが、温度を上昇させることによって生じると考えられる分解産物の問題など、まだまだ解明されるべき点が多々あり、一層の検討が必要であろう。

答： 中嶋 典子(鳥大 第3内科)

37°C Incubation は恒温槽を用い、温度の変化はさほどない。4°Cは冷蔵庫を用いて $\pm 20^\circ\text{C}$ 位の変動し

かない。今回反応時間を短くするという目的から行なった。4°C法との間で非常にいい相関を認めた臨床的には問題はなと思う。

(座長に対して)

37°C Incubation による変性物質を検討する必要がある、今すぐ4°C法から37°C法にできるとは思っていないが、今の時点では代わる可能性を示唆していると思う。

*

6. 肝硬変症を合併する原発性肝癌の肝シンチについて

鷺海 良彦 西谷 弘 高橋 信
(広島赤十字病院・広島原爆病院 放射線科)

肝硬変症に原発性肝癌が合併するものは約1/3、原発性肝癌に肝硬変症を合併するものは約1/2といわれている。われわれの病院にて最近2年間(45.1~46.12)までの全剖検数は220例であり、肝硬変症は31例であった。これら肝硬変症のうちで原発性肝癌を合併しているものは8例で、約26%を占めている。これらの症例で肝シンチを行なったものは、肝硬変症13例、原発性肝癌を合併するもの7例であった。これらの肝シンチ像について検討した。肝硬変症を組織別にみると甲型8例、乙型4例、胆汁性1例であり、肝硬変症に特徴とされる flying bat type のものについては各組織別に差はなかった。原発性肝癌を合併しているもの7例のうち、1例は混合型で甲型を呈していたが、6例はいずれも肝細胞癌で5例が乙型、1例は甲型であり、合併例は圧倒的に乙型が多かった。また肝シンチ像については両者に差はみられなかった。

*